2020年5月17日（日）「まことの知恵、まことの知識」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 1:12-18

12 私コヘレトは、エルサレムでイスラエルの王であった。
13 天の下で起こるあらゆることを、知恵によって探究しようと心を尽くした。これは神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務めであった。
14 私は、太陽の下で行われるあらゆる業を見たが、やはり、すべては空であり、風を追うようなことであった。
15 曲がったものはまっすぐにならず、失われたものは数えられない。
16 私は心にこう語りかけた。「私は、かつてエルサレムにいた誰よりも偉大になり、多くの知恵を得た」と。私の心は多くの知恵と知識を見定めた。
17 知恵を一心に知ろうとし、また無知と愚かさを知ろうとしたが、これもまた風を追うようなことだと悟った。
18 知恵が深まれば、悩みも深まり、知識が増せば、痛みも増す。

《新改訳 2017》伝道者の書 1:12-18

12 伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。
13 私は、天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り出そうと心に決めた。これは、神が人の子らに、従事するようにと与えられた辛い仕事だ。
14 私は、日の下で行われるすべてのわざを見たが、見よ、すべては空しく、風を追うようなものだ。
15 曲げられたものを、まっすぐにはできない。欠けているものを、数えることはできない。
16 私は自分の心にこう言った。「今や、私は、私より前にエルサレムにいただれよりも、知恵を増し加えた。私の心は多くの知恵と知識を得た。」
17 私は、知恵と知識を、狂気と愚かさを知ろうと心に決めた。それもまた、風を追うようなものであることを知った。
18 実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識が増す者には苛立ちも増す。

【序論】

人間とは如何なる存在であるか。様々な見解があるなかで[1]、コヘレトは「知恵（または知識）を追い求める存在」であると言っているようです。もう少し敷衍して「技術を追求する存在」と言ってみてもよいでしょう。良く言えば探究心／向上心／競争心。確かにそれなくして文明は発達していきません。しかし、この上昇志向はどこまで続くものなのか。「向上」と言えば響きは良いですが、ある種の「不満」の表れとも言えるのかもしれない。人はどこまで行けば満足し、真の幸せに到達するのか。人類はどこへ向かっているのか。

[1] M. エリクソンによる７つの「近代的人間観」（『キリスト教神学』第４巻 pp. 14-22）
①機械　②動物　③性的存在　④経済的存在　⑤偶然という力の前になす術のない存在
⑥自由を求める存在　⑦社会的存在

【本論】

今日も「コヘレトの言葉」に耳を傾けてまいりますが、12 節は 1:1 と同じように「**エルサレムの王**」の言葉であることが強調されています。

私コヘレトは、エルサレムでイスラエルの王であった。（1:12）

本書の著者問題については第一回目の説教でお話しさせていただきましたので、ここでは割愛しますが、短い言葉でまとめるならば、「イスラエル最大の知恵者ソロモンならこう語ったに違いない。こういう悟りに至ったであろう」との想定の下で書かれた書であるということです。

本論１．つらい務め（13 節）

天の下で起こるあらゆることを、知恵によって探究しようと心を尽くした。これは神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務めであった。（1:13）

コヘレトは人生の意義を求めていました。自分は何のために生まれ、何のために生きているのか。その答えを見つけるために、持てるすべての知恵を尽くしました。「知恵」という言葉は如何にもソロモンらしい表現です。ソロモンは王となったとき、神に知恵を求めて祈りました（1 列王 3:4-15）。その祈りは御旨に適い、神はソロモンに驚くべき知恵を与えられました。

神はソロモンに、非常に豊かな知恵と英知、そして海辺の砂浜のような広い心をお与えになった。ソロモンの知恵は、東方のどの人たちの知恵にも、エジプトのいかなる知恵にもまさっていた。彼は、エズラ人エタンや、マホルの子らであるヘマン、カルコル、ダルダの誰よりも賢く、その名声は周りのすべての国々に知れ渡っていた。ソロモンは三千の箴言を語り、その歌は千と五を数えた。レバノンの杉から、石垣に生えるヒソプに至る草木について論じ、獣や鳥、這うものや魚について語った。ソロモンの知恵を聞きつけたあらゆる国の王のもとから、その知恵を聞こうとあらゆる民がやって来た。（Ⅰ列王 5:9-14）

ここにはソロモンがどのような知恵を持っていたかが具体的に書かれています。多くの箴言と歌を残したということは、優れた詩的感性を持っていたことを意味するでしょう。それは幼少の頃から培ってきた聖書知識のみならず、王室で読み聞かされてきた様々な国の文学から得た知識によって構築されたものだったと想像します。「**東方**（バビロニア方面？）」「**エジプト**」といった地域についても言及されているように、近隣諸国の知的文献にも精通していたのでしょう。また、動植物についての知識も豊富だったようで、その名称や生態系まで学ぶ機会に恵まれていた。詩人にとって大切なのは自然を見る目であり、そこから

常人では見出せない何かを見極め、言葉にできなくてはなりません。

また、ここには書かれていませんが、彼には外交的手腕があったようで、貿易によって莫大な富を築きました。国内においては壮麗な神殿を建設する実行力と、そのために民を動かすだけの政治力もあった。それに加えて、裁判官としての能力にも恵まれ、難問を解決する知恵に長けていました。

ソロモンの知恵は、これでもまだ語り尽くせませんが、ありとあらゆる能力を用いて人生の意味の探求に努めたということでしょう。「**天の下で起こること**」という表現は「**太陽の下**」（1:3）つまり「世俗の世界」と対比的な世界観であり、神が人間にお与えになった人生に対する意味をどうにかして見出そうとする姿勢を表しています。そこには、幸と不幸、痛みと苦しみ、病と死、富と貧しさ、敵意と争い、罪と赦し、愛と妬みなど、あらゆる事柄が含まれてくるでしょう。それらの多くは簡単に答えを出すことができず、無理に答えを引き出すことによりかえって誰かを苦しめてしまうこともあります。如何なる知恵をもってしても答えきれない物事がこの世には多く存在する。コヘレトは民を裁くうえで何度も答えを出しきれない経験をしたのではないでしょうか。出した答えが本当に正しかったのかどうかも分からず、誰かに恨まれ、後々まで引きずったこともあったと思われます。こちら立てればあちらが立たぬ。そういう様々な経験を通して、物事を判断するということには悩みが伴うことを知ったのです。それが「**これは神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務めであった**」という言葉の一側面ではないでしょうか。

私も親として生きておりますと、二人の子どもの喧嘩を仲裁しなくてはならない場面が多くあります。しかし、子どもたちの言い分をそれぞれ聞いてみますと、現場を見ていない者にはどっちが正しいのかがほとんど分からないのです。世の中はもっと複雑化しています。何が真実であるかが分からない中で判断を下さなくてはならない立場の人には、多くの悩みが伴うでしょう。

本論２．欲求不満（14-15 節）

私は、太陽の下で行われるあらゆる業を見たが、やはり、すべては空であり、風を追うようなことであった。曲がったものはまっすぐにならず、失われたものは数えられない。（1:14-15）

ここではコヘレトが感じていた、世界に対する欲求不満が現れています。「**曲がったものはまっすぐにならず、失われたもの[2]は数えられない**」。人間社会には確かに「歪んだ」事柄がたくさんあります。また、「欠けた」情報や「失われた」データも多く存在するでしょう。それが

[2] 新改訳 2017 では「欠けているもの」。原文で使われている「חֲסָרוֹן」（ヘスローン）は「欠け」を意味する。

おかしいと分かっていながらも、どんなに知恵を用いてもそれらを真っ直ぐにすることができないところで、人間は苦しむのです。不正がまかり通り、悪い者が栄える。誠実に生きている人が損をしているように見える。

14 節では「**すべては空であり、風を追うようなことであった**」と言われています。「**風を追うようなこと**」(וּרְעוּת רוּחַ) という表現は本書に繰り返し出てきますが (1:14, 17、2:11, 17, 26、4:4, 6, 16、6:9)、掴もうとしても掴めず、解決しようとしてもできないことへの不満を絵画的に描写しています。しかし、私たちも知っているように、解決できないからといって問題をそのままにしておいてよい世界でもないのです。面倒であっても答えを見出す努力をしなくてはならない。これは疲れる作業であり、「**神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務め**」と感じる。

困難な問題に直面しているとき、外を歩いているとふと心をよぎることがあります。呑気に生きている動物や鳥が羨ましいと感じることがあるのです。彼らはただ本能のままに生きていて、知恵が与えられていないために、金銭に対する執着もなければ、人間関係の悩みもありません。なぜ人間だけがこんなに苦しんでいるのか。このたびの新型肺炎も、人間はその見えない敵を認識しているからこそ悩み、対処することが求められるのであって、何も知らない動物は自然に身を任せているだけです。人間には知恵が与えられているがゆえに責任が問われる。放っておくことは許されず、その問題をどう解決していくか、どれくらいの経済的損失が生じるのか、自分はあと何年生きられるのか…、いろんなことを考えなくてはなりません。しかし、それでも 100 点満点の答えは決して出ないことを誰もが知っています（安倍のマスクも、各家庭につき 10 万円の給付金も…)。

本論３．知恵の限界（16-18 節）

> **私は心にこう語りかけた。「私は、かつてエルサレムにいた誰よりも偉大になり、多くの知恵を得た」と。私の心は多くの知恵と知識を見定めた。知恵を一心に知ろうとし、また無知と愚かさを知ろうとしたが、これもまた風を追うようなことだと悟った。知恵が深まれば、悩みも深まり、知識が増せば、痛みも増す。**（1:16-18）

コヘレトは「知恵と知識」だけでなく「無知（狂気）と愚かさ」をも知ろうとしたと言います。念のため言葉の整理をしておきましょう。

「知恵（חָכְמָה／ホフマー)」とは「(戦争の）スキル」「(管理上の）知恵」「判断力」「思慮分別」「(倫理的・宗教的）知恵」などを意味します。それに対し「知識（דַּעַת／ダアース)」とは、「洞察力」「識別力」「理解力」などを意味します。いずれも高尚な賜物ですが、敢えて分類すると、前者は生活での実戦、後者は実戦する前に心で見極めることと言えそうで

す。

では、コヘレトが「無知と愚かさ」を知ろうとしたとはどういうことなのか。敢えてそんなものは知らなくてもよいのではないか。「無知（הוֹלֵלָה／ホーレラー）」とは文字通りには「狂気」。つまり「（衝動的に行動する）愚かさ」といったところでしょうか。「愚かさ（סִכְלוּת／スィクルース）」とは「浅はかさ」「愚行」などと捉えればよいでしょう。あくまでも想像ですが、コヘレトは思慮深く判断することに疲れたとき、「もう考えるのもバカバカしくなった。どれ、ここはひとつ衝動だけで行動してみよう。案外それでどうにかなるのかもしれない」と、動物的に動くようなこともやってみたのではないか。しかし、そこにも答えはなかった。

深く考えても、浅く考えても、結局は答えが出ないのがこの世の営みである。人間の知恵には限界があることを知ったのです。もはや何が知恵・知識で、何が無知・愚かさなのか、判別がつかなくなってしまった。「知らない」ということがかえって「知っている」場合があり、知識が増えることでかえって分からなくなることもある。知れば知るほど「知らない」ということを知るようになる。とにかく終わりがない。人間の欲望にも終わりはなく、記録は塗り替えられ、スピードはますます求められ、何を取っても終わりのない世の中である。そのことを、何千年も前に生きていた「コヘレト」は悟り、このように言語化することができたのです。

【結論】

コヘレトはこのような虚無的な結論に到達することによって（読者をそこに引き込むことによって）何を伝えようとしているのでしょうか。彼は「この世の知恵」には限界があることを教えているのです。神なしに増し加える知恵と知識の愚かさ、その行き着く先のないことを証明している。神を恐れることこそ、まことの知恵であり知識であると。

- **主を畏れることは知識の初め。**（箴言 1:7a）
- **私を見いだす人は命を見いだし、主からの喜びにあずかる。私を見失う者はその魂を損なう。私を憎む者は皆、死を愛する。**（箴言 8:35-36）

主を畏れ、主を見出し、主を愛する。そこにこそまことの知恵と知識がある。この世の知恵では到達することのできない究極的なゴールをコヘレトは教えているのです。人は、（神から知恵を与えられた生物として）解決困難な問題にも責任をもって取り組まなくてはなりません。しかし、人間の知恵の及ばないところは神に委ねていくことができる。たとえ間違った判断であったとしても、それを通してさえ神の最善がなされると信じることができるのです。ここに「まことの知恵」があると言えるのではないでしょうか。

【祈り】

　知恵と知識の源であられる神よ。人は、この世で生き抜くために、多くの知恵と知識、そして技術を得ようとします。しかし、どれほど上を見てもそこには終わりがないことを知るようになります。現在のこの世界の情報処理のスピードは、過去最速となりました。建造物の高さも 800m を超えるほどの技術を得ています。しかし、それで神に近づいたということではありません。未だに人類は、罪の問題、愛の問題、老いの問題、死の問題といった解決困難な究極的問題を抱えています。それらには、この世の知恵では答えることができないのです。私たちに神を畏れることを教えてください。そこにこそまことの知恵と知識があるのですから。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人間を動植物から一線を画した存在として創造し、地の管理を任せ給うた、父なる神の愛、
神を離れ、一人歩きを続ける人間世界に降り立ち、神と人との架け橋となり給うた、主イエス・キリストの恵み、
神を畏れ、神を知るところに、まことの知恵と知識を見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。